

題目 どのようなサンクション行使者が好かれるのか？—複数の選択肢がある状況での検討—

氏名 山形詩織

指導教員 高橋伸幸

社会的ジレンマ (SD) の解決策であるサンクションにはコストがかかるため、二次のジレンマ問題が生じてしまう。サンクション行使者は損を被ってしまうにもかかわらず、数々の先行研究において、人々が自発的にサンクションを行使しているのはなぜなのか？この問いに対する答えの一つが、サンクションは行使者の良い性質を示すシグナルであり、周囲から良い評判を得られることで、行使にかかるコスト以上に利益を得られる適応的な行動であるという評判獲得説である。しかし、先行研究におけるサンクション行使者に対する評価は、良いものから悪いものまであり、一貫していない。では、サンクション行使者の評価を左右する要因とは何か？Raihani & Bshary (2014) は、罰行使者の動機が、罰が行使されるに至るまでのコンテキストからどう推定されるかによって、罰行使者の評判は左右されると述べている。Herrmann, Thöni, & Gächter (2011) は、SD 協力者に対する評価は、その個人が属している文化によって異なるという可能性を示唆している。また、Greif (1989, 1994) は、文化が違えば頻繁に行使されるサンクションの種類が違ふということを示している。そこで、本研究では、「社会において特定のサンクションが観察される程度が、そのサンクション行使に対する動機の推定に影響を与えることで、サンクション行使者に対する評価が変化する」という予測を立て、場面想定法を用いた質問紙調査によって検討した。さらに、個人罰、システム罰、排除、うわさの4種類のサンクション選択肢が存在する状況設定にすることで、「複数のサンクションが可能な状況で、あえて特定のサンクションを選択する」という行為が、行使者評価にどう影響するのかということについても同時に検討した。結果として、行使されたサンクションがどの程度観察されるかということは、行使者の動機推定や評価にはほとんど影響していなかったが、動機推定は行使者評価に影響を与えていた。また、この4種類の選択肢が存在するとき、排除・うわさよりも個人罰・システム罰の行使者のほうが、協力的で公平な動機にもとづいてサンクションを行使していると推定され、ポジティブな評価を受けるという結果が示された。これらの結果から、本研究では、サンクション行使者に対する評価はその動機がどう推定されるかによって左右され、他のサンクション選択肢の存在が動機推定に関わる重要な要素となるという新たな知見を提供した。